

3-5		主題	入居者方の外出を通して見えてきたもの	
外出プログラム		副題	～次はどこに出掛けましょうか？～	
個別対応				
研究期間	12ヵ月	事業所	特別養護老人ホーム 光陽苑	
発表者： 末岡 申次（すえおか しんじ）			アドバイザー：平本 穰	
共同研究者： 高橋 浩 栗津 健				
電 話	03-3923-5264	メール	kouyouen@f3.dion.ne.jp	
FAX	03-3923-5166	URL	http://www.timelyhit.ne.jp/senyoukai/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人泉陽会を母体とし、平成3年に開設した特別養護老人ホーム60床ショートステイ4床の介護老人福祉施設です。 併設して、通所介護・居宅介護支援事業所・訪問介護・地域包括支援センター（委託事業）等があります。
------------------	---

《研究前の状況と課題》 ・年々、入居者の方の重度化が進み、今まで行っていた行事やクラブ活動を行える方が少なくなってきた。 ・『入居者の重度化』という大きな課題に対して「以前から行っていた一泊旅行等を行っていくのは難しいのではないか。」という思いがあった。一方では入居者から「どこかに外出したい」との声が多く聞かれていた。こうした流れの中で職員の間には「遠方への外出は体力的に難しいのではないか。」という固定観念が職員に生じ、積極的に外出を計画することに二の足を踏んでいた。 ・（上記の様な）職員の思い込みで、外出する機会が減ってしまうのは如何なものか、との意見が出てきた。その結果、今私達に出来る外出計画の形とは何か？という思いを込めた外出企画を実行するに至った。	《研究の目標と期待する成果》 ・入居者の方の希望をできる限り聞き入れていき、笑顔を多く引き出していく。 ・普段なかなか出掛けられない、遠方への外出によって、入居者方の気分転換（リフレッシュ）を図り、外に出る楽しみを味わっていただく。 ・課題を1つ1つクリアして外出を実現することで、担当した職員にも自信と喜びが生まれることが期待できる。 ・また、少し趣向の変わった外出企画が出てくるようになると「あんな所にも行けるんだ…今度の自分の担当の時には…」という様な創意工夫の意識が芽生えて、外出企画自体が更に充実していくと思われる。 ・ご家族と外出計画について相談をし、準備を行っていく中で、より深いコミュニケーションがとれるようになる。
---	---

《具体的な取り組みの内容》

- 毎月行っている入居者との茶話会の中で、入居者の方にどこに行ってみたいかの希望を聞く。
- 個別の面談や日々のコミュニケーションの中でも入居者の希望を聞いていく。
- その中で多く挙がった、行ってみたい場所や、個別の希望場所を汲み入れて、計画を立てる。
- 春・夏・秋・冬のそれぞれの時期の季節感を味わって頂くことを念頭に置き、年に4回実行していく。年4回の実施の間にも、近くの場所を設定して、積極的に外に出る機会を設けていく。
- 人数を少数にして、行動範囲を広げる。
- 参加する機会が均等になる様に配慮して企画していく。(遠くに場所を設定した企画を実施したら、次の回は近くの場所を設定しその方のADLに合わせた企画を立てる)
- 一回の外出には、職員…4～5名 入居者…3～4名程の参加であった。
- 過去の外出場所で入居者から「東京ディズニーランドへ行きたい」との希望が出た。遠方でもあり体力的な面も考えると難しいのではないかと、との意見も多かったが、その中で職員が入居者の希望を実現したい、という一心で様々な課題を乗り越えて、実現するに至った。

《取り組みの結果と評価》

- 入居者の方から、「楽しかった」「また行きたい」「今度は〇〇へ行きたい。」との声が聞かれた。
- 年4回だが、参加する入居者の方が限られて来てしまっている。
- 年2回行っている家族懇談会では、外出に行った際の写真をスライドにして、ご家族に見て頂いた。その際、ご家族から「こんな笑顔は久しぶりに見た。」「ありがとうございます。」との言葉を頂いた。
- ご家族が外出の計画段階で協力的に参加して頂き、より密なコミュニケーションが取れるようになった。

《まとめ》

- 「外出企画は体力のある方が行けるもの」という形になりつつあり、ADLの状態により参加が難しくなっている方がいらっしゃる現状である。今後については、この点を見直していくと共に、「入居者の方の希望を100%叶える」という思いの実現に近づけていく為、「年4回」にこだわらず「個別外出」についても行っていきたいと考えている。
- また外出をより楽しんで頂く為に、より多くのご家族の参加も呼びかけていきたいと考えている。

《提案と発信》

「外出する」ということは、我々にとっては何でもないことかもしれない。しかし、施設で生活している入居者にとっては、好きな時に好きな所へ行ける訳ではない。我々にとって当たり前のことであっても、入居者にとっては当然ながら当たり前ではない。我々がどれだけ入居者にとっての「当たり前」の気持ちに近付いていけるのかを外出を通して確立していければと感じる。

【メモ欄】